2022年度（第47回）学術研究振興資金　学術研究報告

学　校　名	**上　　智　　大　　学**	研究所名等	イスラーム地域研究所	
研 究 課 題	現代イスラームにおける公共性再構築をめぐる動態の研究		研 究 分 野	文　　学
キーワード	①イスラーム　②諸宗教　③地域研究　④公共性　⑤融和　⑥対立　⑦共生　⑧多元性			

○研究代表者

氏　　名	所　　属	職　　名	役　割　分　担
赤　堀　　雅　幸	上　智　大　学 総合グローバル学部	教　　授	総括、人類学

○研究分担者

氏　　名	所　　属	職　　名	役　割　分　担
阿　部　　る　り	上智大学　文学部	教　　授	ドイツ、トルコ担当、メディア研究
稲　葉　　奈々子	上　智　大　学 総合グローバル学部	教　　授	フランス、日本担当、社会学
岩　﨑　　え り 奈	上智大学　外国語学部	教　　授	マグリブ担当、社会経済学
久　志　本　　裕　子	上　智　大　学 総合グローバル学部	准　教　授	マレー世界担当、人類学
澤　江　　史　子	上　智　大　学 総合グローバル学部	教　　授	トルコ担当、政治学
辻　上　　奈 美 江	上　智　大　学 総合グローバル学部	教　　授	マシュリク担当、社会学
東　長　　靖	京都大学大学院　アジア・アフリカ地域研究研究科	教　　授	トルコ他担当、思想研究
山　口　　昭　彦	上　智　大　学 総合グローバル学部	教　　授	イラン担当、歴史学
湯　浅　　剛	上智大学　外国語学部	教　　授	中央アジア担当、政治学

現代イスラームにおける公共性再構築をめぐる動態の研究

1. 研究の目的

(1) 近代市民社会を構成する大きな要素の一つである「公共性」を鍵概念として、イスラームと現代社会の双方について理解を深める地域研究の実践を目指す。
①イスラームに伝統的に別種の公共性が備わっていたのかを問う。
②ヨーロッパ的な公共性の受容の過程を問う。
③現代においてイスラームの公共性はどのように再構成されつつあるのかを問う。

(2) 1990 年代後半に柔軟な地域研究として構想され、国内研究機関の連携によって継続されてきたイスラーム地域研究を継承し、新たに展開する。
①ムスリムが少数派として生きる地域にも目を向け、各地域の事情を精査しつつ、同時代を生きるムスリムたちの共通性と多様性を総体として理解するよう努める。
②グローバル化の波のなかを生きるムスリムたちの間に、私たちと同じように内なる葛藤や多様な方向性があることを認め、彼らの公共性再構築への動きと、私たち自身のそれとを相互に参照し連動させ活かす方策を検討する。

(3) カトリック大学でイスラームについて研究することを自覚し、研究を宗教理解促進や宗教宗派関係の調和的展開に活かせるよう、他の研究機関と連携した活動を展開する。
①2022年度新設の上智大学イスラーム地域研究所（Institute of Islamic Area Studies, SIAS）の最初の共同研究として本研究課題に取り組み、併せて研究所の機能の充実を図る。
②本研究の各種取り組みについて、他の学内11研究所との積極的な協働を図る。
③イスラーム地域研究所以外に存続する唯一のイスラーム地域研究拠点である京都大学イスラーム地域研究センター（および同大学ケナン・リファーイー・スーフィズム研究センター）とこれまで以上に積極的に連携する。
④これまでも連携してきた海外研究機関（フランス国立社会調査センター宗教社会ライシテ班、フランス経済法社会研究資料センターなど）との研究連携を強化する。

2. 研究の計画

(1) 研究班の立ち上げと各班の研究目的の明確化を行い、各班での研究会等を実施する。
①中東、中央アジア、東南アジア、ヨーロッパの専門家からなる研究代表者、研究分担者に加え、研究協力者に北米、アフリカなどの専門家を迎え、対象地域を世界大に広げる。
②大衆イスラームの作り出す公共性（A班）、水などの資源配分をめぐる公共性（B班）、政治的急進派に対抗する公共性をめぐる動き（C班）の3班を当面は設定する。

(2) 2020 年以来、新型コロナウィルスの流行により停滞していた現地調査の活発化を図る。
①各班で研究分担者等の個別調査を実施する。
②いずれか1班による共同調査を実施する。

(3) 学内外、国内外研究機関との連携によりワークショップ等を実施する。
①海外研究機関と連携して国際ワークショップを1件以上開催する。
②学内外研究機関とも連携してワークショップ等を開催する。

(4) 公開講演会等を開催して研究の周知と成果の還元を図る。
①上智大学が研究成果を広く公開する機会であるSophia Open Research Weeks（SORW）に積極的に参加する。
②その他、講演会、解説付き映画上映会などを実施する。

(5) 研究成果の国際会議での発表や成果物の刊行を積極的に進める。
①2023年度に開催予定の第6回中東研究世界大会（World Congress for Middle East Studies, WOCMES 2023）での部会発表に向けて準備をする。
②論集SIAS Occasional Papersを刊行し、本研究の成果をここで発表する。
③講演録SIAS Lecturesを刊行する。

(6) 本研究に関連の研究資料を収集する。
①各班が予算内で資料の購入を計画し、実施する。
②収集資料を一般の利用に供せるよう、中央図書館と交渉する。

(7) 研究所のウェブサイトなどを介した、研究情報発信を充実する。
①ウェブサイトの更新体制を確立し、日英語による発信を推進する。
②実施した講演などのオンデマンドでの配信を積極的に行う。

3. 研究の成果

(1) 研究班を立ち上げ、研究打ち合わせ、研究会、研究合宿を実施した。
①研究代表者1名、研究分担者8名に加え、若手研究者等が共同研究所員2名、準所員1名、PD研究員1名として参加し、本学他の博士後期課程学生も積極的に関与した。
②全体会議1回（7月）により大きな方針を定め、各班で適宜に研究打ち合わせを実施した。
③研究会3回（12月、2023年2月、同月）、研究合宿1回（2月）を実施した。
(2) 現地調査 4 件を実施した。
①エジプト（10月）、モロッコ（2023年2月）、トルコ（3月）で個別の調査を実施した。
②3名による共同調査1回を2023年3月にヨルダンで実施した。
(3) 研究連携を伴うワークショップ 3 回を実施した。
①フランス国立社会調査センター宗教社会ライシテ班、京都大学イスラーム地域研究センター、ケナン・リファーイー・スーフィズム研究センターと連携して国際ワークショップを7月にオンライン、2023年2月に2名をパリから招聘して対面で実施した。
②科学研究費補助金助成研究との共催により、7月に国際ワークショップを対面で開催した。
(4) 学生などを対象としたイスラーム地域研究の周知と成果還元の催しを 4 回実施した。
①SORW 2022の企画として、オンラインシンポジウム「スーフィズムにみる音と身体の技法」を11月に開催した。
②イスラーム関連の解説付き映画上映会3回（5月、6月、11月）実施した。
(5) 研究成果を 2 件刊行した。
①SIAS Occasional Papersの第44号（訳書、出版物②）を刊行した。
②SORW 2021で実施したオンライン連続講演会の内容をSIAS Lectures第9号（講演録、出版物①）として刊行した。
(6) 本研究に関連の研究資料を収集した。
①予定していた欧文図書約30件に加えて、国内所蔵が乏しい貴重資料である*Records of the Kurds: Territory, Revolt and Nationalism, 1831-1979* (A. L. P. Burdett ed., 13vols., Cambridge Archive Editions, British Documentary Sources)を購入した。
(7) 研究所のウェブサイトなどを介した、研究情報発信を充実させた。
①日英語による研究情報の公開を継続した。
②SORW 2021で実施したオンライン連続講演会（上述）の一斉再配信を4月に実施した。

4. 研究の反省・考察

(1) 全体としては活発に研究を推進したと思われるが、初年度でもあり、また新型コロナウィルスの影響も受けて、年度下半期に活動が偏る形になった。また研究全体の収斂の方向も現時点ではあまり見えておらず、これも 2023 年度の課題となる。
(2) 研究体制整備と研究会等実施
①予定ではさらに多くの研究協力者の参画を呼びかける予定であったが及ばなかった。
②研究会等実施も2022年度の上半期には出足が鈍かった。
(3) 現地調査実施
①年度末に集中して実施する形になり、2023年度には夏期の実施に努めたい。
(4) 学術連携を伴うワークショップ等実施
①年度下半期には対面で行えるようになり、支出はかさんだが、効果はより大きくなった。
(5) 講演会等の研究成果還元
①年度初めから学内での催しを中心に着実に実施を積み重ねることができた。
(6) 国際会議および刊行物による成果発表
①WOCMES 2023の開催の目処が立っておらず、国際会議部会組織については見直す必要がある。
②刊行物については初年度としては充分だが、今後、成果論集の刊行を行い、市販書刊行を目指す。

(7) 研究資料の収集

①C班が予定していた海外招聘が実施できなかったため、*Records of the Kurds*の購入を決断した。今年度、日本国内外のクルドに関係した催しが多かったこともあり、来年度以降に当該資料を有効に活用するとともに、予定の招聘を実施できるよう努める。

②中央図書館を介して、収集資料を学生、研究者の用に供するための手続きは充分に進まなかったため、2023年度に対応を完了させる。

(8) 研究広報の充実

①SORW 2022でのオンラインシンポジウムの各個の講演を、年度内にオンライン配信する予定であったが、果たせなかった。2023年度中に速やかに公開する。

5. 研究発表

(1) 学会誌等

①赤堀雅幸「石原美奈子（編）『愛と共生のイスラーム——現代エチオピアのスーフィズムと聖者崇拝』」『年報人類学研究』13号、150–155頁、2022年6月

②稲葉奈々子「コロナ禍の非正規滞在外国人と貧困」『社会福祉研究』143号、2–11頁、2022年4月

③久志本裕子「障害をめぐるイスラームの言説と共生の文化への可能性：マレーシアにおけるイスラーム解釈の狭小化の問題から」『文化人類学』87巻4号、674–684頁、2023年3月

④湯浅剛「上海協力機構（SCO）の展開からみたウクライナ侵攻と中央アジア国際関係」『東亜』664号、2–9号、2022年10月

⑤Iwasaki Erina et al., "Quantifying Water Consumption through the Satellite Estimation of Land Use/Land Cover and Groundwater Storage Changes in a Hyper-Arid Region of Egypt," *Remote Sensing* vol. 14 no. 11, DOI: 10.3390/rs14112608, May 2022

⑥Yamaguchi Akihiko, "Mediating between the Royal Court and the Periphery: The Zangana Family's Brokerage in Safavid Iran (1501–1722)," *Iran: Journal of the British Institute of Persian Studies*, DOI: 10.1080/05786967.2023.2170814, February, 2023

(2) 口頭発表

①岩崎えり奈、井堂有子「エジプトにおける食糧「危機」が直撃する脆弱層の台所：家計調査データにみる」国際開発学会第33回全国大会企画セッション「ウクライナ紛争と中東・北アフリカ地域の食糧不安・危機：レバノン・エジプト・チュニジアの事例より」明治大学、2022年12月3日

②岩崎えり奈「エジプトにおける食糧『危機』が直撃する脆弱層」上智大学イスラーム地域研究所公開ワークショップ「今日の中東・北アフリカの食糧問題：チュニジア・レバノン・エジプトの事例より」上智大学、2023年2月10日

③東長靖「愛の言葉、愛の音、愛の踊り」上智大学イスラーム地域研究所、京都大学イスラーム地域研究センター主催オンラインシンポジウム「スーフィズムにみる音と身体の技法」上智大学、2022年11月12日（オンライン）

④Inaba Nanako, "Resistance of Detainees and Colonialist Rule in Immigration Detention Centers," IMISCOE Spring Conference, Université Côte d'Azur, Nice, March 17, 2023

⑤Inaba Nanako, "Radical Left Movements as Infrastructure for Anti-Poverty Movements and Creation of Alternative Spaces in Japan," 10th East Asian Regional Conference in Alternative Geography, National Taiwan University, Taiwan, December 9, 2022

⑥Tonaga Yasushi, "Toward the Moderate Islam Based on Sufism," 4th International Intensive Summer School of Sufi Studies, Institute for Sufi Studies at Üsküdar University, Turkey, July 26, 2022 (Hybrid)

⑦Yamaguchi Akihiko, "From Mountains to Plains: Urban Transformation in Early Modern Kurdistan," C01-Research Group 05 Conference on "Historic Cities of Afro-Eurasia, Comparing Tunisian and Mashriq Cities: Establishment, Characteristics and Urban Society/Inhabitants," [MEXT KAKENHI JP23H05413], EPI Polytechnique, Sousse, Tunisia, December 26, 2022

(3) 出版物

①赤堀雅幸編『今日のスーフィズム：神秘主義の諸相を知る』SIAS Lectures 9、上智大学イスラーム地域研究所、2023年3月（「序 今日のスーフィズム：神秘主義の諸相を知る」執筆、1–14頁

②アルマンジョン、ピエール『エジプトのムスリム諸大学における教育、教義および生活』赤堀雅幸監訳、内山智絵訳・解題、SIAS Occasional Paper Series 44、上智大学イスラーム地域研究所、全iv+192頁、2023年3月（「監訳者あとがき」執筆、189–192頁）
③稲葉奈々子、樋口直人編『ニューカマーの世代交代：日本における移民2世の時代』明石書店、2023年3月
④岩﨑えり奈「社会運動としてのエジプト『1月25日革命』のその後」『エジプト』ミネルヴァ書房、61–86頁、2023年2月
⑤岩﨑えり奈「出生率低下があらわす家族のかたち：チュニジア南部タタウィーン地域の事例」長沢栄治監修、竹村和朗編『うつりゆく家族』明石書店、2023年3月
⑥東長靖「スーフィズムとは何か：神秘主義・道徳・民間信仰」『今日のスーフィズム：神秘主義の諸相を知る』SIAS Lectures 9、上智大学イスラーム地域研究所、15–32頁、2023年3月